

浄土の宗教と教育 一

教師よ。清夜、星の下に成道した人類最高の教師、釈尊を憶え。汝の生活が虚偽であるならば、教育の聖座は糞土に穢され、汝の呼吸が誠諦に帰入すれば、汝の上にも、道も光も、徳も力も、来り現われ給うであろう。されば教師よ、合掌して精進せよ。

緒言

本年八月、本部聖講習会及び、島根県連合聖講に於て、部会員のお集りを願ひ、その例会を開き、一般の状況を聞かして頂いたことは非常に有り難いことであつた。その時、私から暫定的な五ヶ条の実行要目を示して、教壇上への新しい労作をお願いした。一月四日から三日間、教育部会第二回講習会が開かれるに當つては、それについて有益な報告も承ることが出来ると信ずる。その時、特に「浄土の宗教と教育」という課題について、私自身、何かと知らせて頂きたいし、会員の方にも考えて頂きたいと思ひ、特に講題をかく定めた次第である。そこで講習に先だつて本月よりこうしたことについて書かせて頂きたいと思ふ。

教師と宗教

宗教と教育との交渉を考える前に、先ず問題となることは、教育者の立場についてである。教師は一面においては、人即ち私人であると共に一面国家の公器である。公人としての教師は、国家社会の色々な制約の中に生きねばならないし、私人としての教師は人を成就しなければならぬ。この私人としての教師は、何を信じてもいい訳であるが、教壇上に私人の宗教を語ることは許されない。ここに日本教育の困難な問題があつた。それ故に過去の日本教育は、完全に宗教を教育から取り捨ててしまつた。そのことがひいて宗教は人生に於て無用であるとの考を植え付け、且つ理智一点張の教育は、やがて国民の美しい情意の発展を阻害した。漸くその弊害を認められ、日本精神の問題が問題とされるに至つて、初めて宗教が教育界において再認識されはじめた。

しかし先の問題は依然として残されてある。即ち、既成宗教語るべからず、教育に宗教を取り入れざるべからず。我々はこの当面の問題について様々な意見、及び、教育者の動向を見せつけられるが、学校教育に宗派宗教を持ち出してはならぬということとを、誤つて私人としての宗教生活さえ、何でもいい、特に既成宗教の全てがつまらぬものとし、心を宗教的カクテルによつてゴマ化す等は大変な間違いである。一切の形式を持たない礼儀がないように、実際の流儀を持たない生花がないが如く、真実の宗教は必ず長い歴史に精練されて、一つの宗教の形態を成就している。教義も、作法も、その他一切を持たない宗教はあり得ない。そこで私人としての教師の実際は必ず、何かの実際宗教によらなければならぬ。

教育者の欠点

教師の宗教に対する態度又は動向を察するに、一般に教育者はあまりにももの考え方が功利的である。右のものを左にすぐ効果ということを考える。仁丹式な、懐中電燈式な、手取り早い効果を考える。特に結びつけやすいのが、忠君愛国の思想と宗教、教壇上の教育的効果と宗教等である。彼の「人の道」教団なるものが世の中に出るや、人道という言葉と、教育勅語の実践ということと、病氣平癒と言ったことが、世の多くの教育者をひきつけた。教育者養成の最高機関たる△△科大学の中さえ、これに侵され、師範学校の教諭や、文学士がその支部長になると言つた様子で、遺憾なく日本教育の浅薄さと、教師の内の生活の貧弱さを暴露してしまつた。忠君愛国の重んずべきは言うを待たない。それ故に、浅薄に忠君愛国と結びつけるのが忠君愛国でないこと、例の右翼の何でもぶつた斬れ式の国士が却つて日本精神の破壊者であるが如くである。忠君愛国主義、日本主義者となるよりも、真実の生活成就が忠君愛国に一致するのである。

ここに於て先ず、最第一に問題されなければならぬことは、教師自体の宗教生活である。教師の精神生活は直ちに教育作業の上に反映するのであるが故に、教師であるより先に真の人間でなければならぬ。

世に「信念」なる言葉がある。政治家にしてこの信念なる言葉を使わない人はない。政治家にまけず、教師も亦「確乎たる信念によつて」と言つたような言葉が平気で使われている。世に、この「信念居士」ほど困つた者はない。信念居士らは輔弼の重任をあやまつて罪を闕下にわびねばならぬ日すら、光風斉月とうそぶく。「確乎たる信念によつてこの度出馬」するというのが如き信念は、決して宗教的信ではあり得ない。2

更に一言しておかねばならぬことは、教育者の雷同性である。雷同することは内面に何もものもないこと、勢の大を真実と考える迷妄からおこる。希望社が華やかなる頃は、教育者の大部分がこれについて躍り、何かおこると一時に手をひく。修養団が愛汗の旗をふれば、それについて躍り、人の道が出て知名の士が集ると言えばこれに走る。かくも何ももの成就されないのは、功を急いで雷同するが故である。我々は何よりも先ず、真実なる教えによつて愚なる者の真剣と、小賢きものの懈怠とから救われ「真」を生きねばならない。(第十七巻第十一統)

一、教育の理想と宗教

教育の理想

教育には理想がある。理想のない処には教育はない。その教育にしてもし明確なる理想を欠くならば、教育はかえつて拭ふべからざる禍痕を残すであろう。であるから、何はさておいても、教育の理想がはつきりしなければならぬし、教育の理想が明らかになされた後、それが実現化されて、そこに極めて適切なる教育手段が生れて来るのである。教育の理想が明瞭にされないで、いたずらに教育技術の末梢に走り、その手段方法の巧拙にのみ心を勢するが如きは、本末転倒といふべきである。而して

教育の理想は、唯学校教育における理想であるばかりでなくて、それは同時に個人の理想であり、国家社会の理想であり、全人類の理想でなくてはならない。

然るに我等はすでに、教育勅語において、教育の理想、日本教育の理想を示されているのを知っている。誠に教育の勅語こそは、日本の国是であり、理想であると共に教育の理想である。もし教育者にして、教育勅語の御精神の把握を欠き、教育勅語に対する感銘なく、その徳目に於ける実践を欠くならば、教育者自身が、日本教育の冒瀆者となるであろう。

しかして教育勅語は教育壇上において何を成就すべきであるかを示したまうのであるか。それに対して三つの使命を発見する。三つの使命とは、

1、人を造ること……………徳器成就

義勇奉公

2、国民を造ること……………

扶翼皇運

修学習業

3、国家社会への貢献的能力の涵養……………

啓発智能

以上の三項である。而して教育勅語には、その初めにおいて、

「皇祖皇宗国ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ。」と、国家理想の根本³ 本体を明示せられた。誠に筆国宏遠、樹徳深厚なる祖宗一貫の本流こそ、永遠に民族国家をして、道義不退に成就せしむる根源である。道は決して新にして奇抜なるものゝ、偶発によるのでなくして、普遍に実在する光、宏遠深厚なる徳それ自体の顕現にすぎないのである。

而してかかる普遍の聖徳は如何なる相をとるのであるか。

「億兆心ヲ一ニシテ世々ソノ美ヲナセル」

「朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテミナ其徳ヲ一ニセン……………」

と宜せ給うが如く、億兆一心、君民一徳こそその徳の顕現せる相であった。

一とは、誠に絶対数である。真実なるもの相は一である。真実なるものゝ相は一であり、一になることは真実になることである。しかしそれは、本来二なるものゝ一になるのでなくして、一なるものが一になるのである。本来一なるものが、その真実の相に帰るのである。一なるものが抽象分裂して、二になり四になることは、徳への逆行であり、悪であり、流転である。仏教において、涅槃の理想を説くも、涅槃に通ぜざれば一を得ないからである。一なるものは、常恒であり、普遍である。徳は永遠に一心一徳である。一心一徳は如何に発展して千万となるとも一に帰せしむるのである。億兆一心と言われる所以である。

国体の精華と教育の淵源

億兆一心、君民一徳こそは、誠に我が国体の特質であつた。一心一徳、徳は必ず一であり、この徳が実現せられたる相、即ち一心である。一は絶対であり、全一なるものである。前に述ぶる所の、祖宗の肇国宏遠、樹徳深厚と宜らせ給う所以も亦、この一徳一心の根本態を示し給うものである。

而して、この祖宗の肇国宏遠、樹徳深厚を根幹として現われる所の億兆一心、君民一徳こそ、いわゆる国体の精華と言われるものである。誠に天壤無窮の皇運を根幹としての、君民一徳、億兆一心こそ、我が国体の精華と言うべきものであつて、教育の淵源も亦、これをおいて外にあり得ないのである。されば教育勅語には、

「我カ皇組皇宗国ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ 我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々ソノ美ヲ濟セルハ此レ我カ国体ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦実ニ此ニ存ス。」

と仰せられ、以つて教育の淵源の規模広大を示し給う所以である。

御聖徳

祖宗の国を肇め給うこと宏遠に、徳を樹て給うこと深厚であるとは、又、特に「聖徳」の尊重広大を示し給うものであると言つていいと思う。

国民が「克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々ソノ美ヲ濟セル」所以のものは、全く天皇の御聖徳の実現せられたるものに外ならないのである。即ち大御心が国民の上にあられ給うて、国民の善き生活を成就したものである。国民の個々が、善をあげみ、徳を積むことによつて、日本の国が美しく成就するのではなくて、国民の忠孝を根底とする善き生活の全てが、大御心のままが顕現し、成就したものである。国民が如何に善行美徳を成就しようとも、御聖徳、大御心を出ずることは出来ない。大御心をぬぎにし奉つての善行美徳はあり得ないのである。であるから、悪とは実に、大御心に叛き奉ることである。

されば、一心一徳とは、実にこの大御心に帰し奉り、限りなく聖徳を頂いてゆく生活のことである。我が歴史を播く時、このことを明瞭に知ることが出来る。国が乱れるとは、大御心に叛き奉つた日のことであり、国治るとは、この大御心に帰し奉り、一心一徳の世界に生かされることであつた。されば、仏教に言う我慢貪欲こそは、一心一徳の世界より自己を抽象し反逆する心なるが故に、個人的幸福のみによつて動くものは誠に大御心に叛き奉る悪逆の子と言うべきである。乱臣賊子と言ふべきである。国家に依存して、私腹を肥し、名利の奴となれるが如きは、やがて大御心を悩まし奉る輩と言ふべきである。かかる子は皆、一大懺悔によつて、この一心一徳の御聖旨に帰すべきである。而して誰か悪逆の子でないものがあるう、反逆の輩でないものがあるうか。ここに国民生活の第一歩は、内なる懺悔によつて、大御心に帰し奉ることより発せらるべきである。

国家理想

誠に教育壇上こそは、国家理想の若き国民、第二の国民に対して明らかにされ、その実現の第一歩を成就さるべき処である。もしこの教育の聖壇において、明確なる国家理想の認識が欠除されんか、恐るべき結果をまねくであろう。

自ら賢をたのみ、善を誇り、小智小才におごつて己を主張する個人主義的我利々々根性は、大御心によつて否定せられ、大懺悔によつて、不忠不孝に徹し、君恩聖徳の広大に帰し奉らなくてはならない。

重ねて言う、国家理想というも、大御心、御聖徳の奉戴をおいて外にないことを。

教育理想の実現

億兆一心の国体の精華をおいて教育の理想はなかつた。ここに日本教育の淵源は実に明らかに示された。ここに於て、宏遠深遠なる一心一徳は如何に実現せられるのであろうか。謹んで教育勅語を拝読する時、三つの思し召があると思う。教育理想の実現三ヶ条とは、

1、人を造ること……………徳器成就

2、国民を造ること……………臓器齡

3、国家社会への貢献的能力の涵養……………離雛鯛舶

徳器を成就するとは偉大なる人を造ることである。官吏を造り、軍人を造り、実業家、技師等々を造る以前に、真に人を造ることこそ教育の根本眼目でなくてはならない。人が出来ていなければ、人は禽獸に近い。禽獸とは本能のみを有するものである。本能我によつて動く者は高き価値我を持たぬものである。価値我なく、しかもそれを愧じず、されば仏典にはこれを「無漸無愧なるを畜生と名く」と説かれる。而して人をして本能我を超えて、価値実現の生活を成就せしむる契機は、唯かかつて「教養」にある。教えのみが人をして人たらしめる。ここに人間世界にのみ教育作業の成される所以がある。教育のみが人を造る。教えのみが人として偉大ならしめる。されば教育目的の第一は、教えて人を造ることにおかすべきである。重ねて言う。教育のみが人を造る。道の成就も、国家政令の成就も、聖賢偉人も唯、教えによつて生る。

徳器の成就こそ、教育の第一眼目である。(第十七卷第十二号)

浄土の宗教と教育 二一

徳器の成就

教育目的の第一は人を造ることにある。その課せられる教育的労作を通して「人」を造ること、これ先ず何よりも重大なる教育の眼目とされなくてはならない。これ教育勅語に「徳器ヲ成就シ」と宜う所以である。

官吏である前に人でなくてはならない。教師である前に偉大なる人でなくてはならない。その他、何であるより先に人でなければならぬ。人類の高き燈炬も人であり、国家の中心も人である。されば一つの社会的役割を果す細胞であるより先に、偉大なる人、真実の人格を成就することが、第一に教育の理想とされなければならない。

国民

然るに人を造る教育は、直ちに国民を造る教育でなくてはならない。日本教育は、支部人を造るのでも、米国人を造るのでもない。日本国民を造らなくてはならない。如何に偉大なる人であつても、それが日本国家に反逆するものであり、国民を仇敵とする限り、日本の国土にあるべき存在ではない。ここにおいて人を造ることは国民を造ることに限定せられる。

しかし真の国民を造るといふことは、人類の仇敵を造ることではない。真の国民は同時に立派なる人でなくてはならない。真の人でなくして立派な国民でありようはない。

国民は「義勇奉公」の人でなくてはならぬ。義勇奉公とは、一旦緩急あるとないと係らず、平生不断君国に対して無我であることである。而してその国民としての生活がそのまま「天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼」し奉るものでなくてはならない。これ教育の根本眼目である。

啓蒙智能

教育の第三眼目は『学ヲ修メ 業ヲ習ヒ 以テ智能ヲ啓蒙』することである。明治初年以來、世界文明の吸収に急なるあまり、日本教育の一番力を入れたのは、この第三ではなかつたか。これによつて日本は科学文明、物質文明において目覚ましい発展をとげ、列強にならぶのみならず独自の世界すら建設した。

然るに科学偏重、物質文明の謳歌は、日本本来の精神生活を失わしめたかの感があり、一時風靡した世界主義は日本それ自体をも忘れしめたかの観があつた。然るに最近の国家主義の台頭は再び民族をして日本を見出さしむるに至つた。

教育は普及した。文明は成就される。民族主義、国家主義は徹底した。様々の非常時を通して、我々は尊い体験をした。而して日本はそれだけで安心であつたか、我等はここに又新たな悲痛な悩みに到達しなければならなかつた。

欠陥

一時、日本は左翼の学生によつて神経をとがらせなければならなかつたが、民族主義国家主義の台頭は、左翼にかえる右翼を以つてした。けれども、右翼運動は遂に朝家を挙げて震撼せしむるの暴挙となつて現われた。「徳器の成就」人を造ることの欠けたる義勇奉公が、果して真の義勇奉公であろうか。義勇は遂に義勇でなくて、血気の小勇となり、国家主義とは恐るべき逆殺にまでなつて来た。

凡そ社会的現象の背後には、必ずその依つて興る原因がある。即ち、その現象的社會状勢と、その思想的背景とである。国民の経済的行詰り、即ち経済的非常時の深刻化と共に曝露された政治界経済界、乃至は、国家官吏等々の腐敗墮落、その非国家的なる醜状が国民の反感をかうと共に、国家主義者等は、その指導精神を仏教に求めた。あらゆる思想のカクテルによつて教育された国民に力はない。情熱と意気は乏しい。然るに兎にも角にも一つの思想を以つて世の中を見、それが国家主義と結びつき、社会の底にかくれて、いわゆる「志士」を養成し、国家革新の実を一举にして挙げんとするもの、最近にくり返されたる事件である。

我等はここに日本の現状に直面して幾多の問題を受け取らねばならなかつたが、その第一は「教育」の問題である。国民指導の根本理想の問題である。日本教育の行詰り、その打開の第一は「智識の切実り」もしくは、技術末梢の教育より遡つて「人を作る」徳器の成就、物質文明人よりも真の精神文化人をつくる全人的教育への方向転換である。

誠に政治経済等の問題は直ちに眼に見え、一国文教の問題は差し当たり眼に見えないが故に、これが等閑に附せられ、文部大臣すら今日まで伴食大臣を以つてこれにあてがわれた。日本現在のすべては日本教育がその大半の責任を負うべきである。

無信、迷信

日本朝野が、くり返される三等国的事件に肝をつぶしている時、これは又何とした民族の迷信的跳り方であるか。高楠博士は、本年の初頭において日本の悲しむべき現状を指摘せる中に「教育者の無信性」と「日本インテリの迷信性」を挙げた。確かに明治初年の「文明開化」の提唱と共になされた「廃仏毀釈」の効は明らかであらわされて、教育者は宗教を以つて愚者弱者の求むべきものとして、之れを愚弄し、宗教なきを以つて当然となし、随つて宗教的教養に対しては何等の考察なく、関心なく、もちろん児童生徒にむかつて、宗教心啓蒙の教育的労作の皆無であつた結果は、日本インテリをして極めて低劣なる文化人たらしめた。かかる跛的教育を受けたる知識階級は、人生の全的領解の態度を知らなかつた。現実人生に於ては宗教は心の食である。随つて彼等はその思うにまかせて宗教?の門に走つた。そこには、インチキな香具師が待つていた。其庭に勢い、類似宗教の汎濫時代を出現した。

赤門出の学士にして、若き生神様、女神の前に拝腕せるあり、文理科大学出の文学士にして迷信の伝道者となるあり、女子師範の校長にして稲荷を祭り、全校の生徒に、その祭日に赤飯を食せしむるあり、対校競技の必勝を村社に祈願して、児童宗教

心の養成なりとする校長あり、最高学府を出でて大本教の狂信者となる位は平気なものの、常識と、御利益と、迷信をつきまぜて、国家主義的悪臭を添えれば、日本インテリはこれに集団すること腐敗物に蠅の集るが如き現状である。亡国的現状と言わなくてはならない。而して、かかる醜状は「人を造る」ことにおいて欠いた日本教育の全てがその責任を負うべきである。宗教をぬきにしての「人」の教育は決して究竟的ではあり得ない。真実ではあり得ない。
(第十八巻第一号)

浄土の宗教と教育 三

宗教（仏教）の使命

三宝

仏教は三宝によつて成立する。三宝とは、仏、法、僧である。而して三宝に対する見解にも亦幾多あるが、最初には仏とは釈尊であり、法とはその解ける教法であり、僧とはその教団の人たちであつた。釈尊の滅後は、仏陀の像と、経巻と、その教経を修行し伝持する僧と、これいわゆる伝持の三宝である。

しかしここには、仏とは久遠の本仏、法とはその本仏の血液、その内的自証を説けるもの、僧とはその永遠の生命に生かされるもの、いわゆる、同体三宝をさしておく。無量寿仏と、その本願名号を説ける教法と、それに救われて生きる僧、即ち人がそれである。一にして三、三にして一、三即一の具体的宗教である。

仏教

宗	……	……	生命	……	……	……	仏
教	……	……	教	……	……	……	法
人	……	……	……	……	……	……	僧

宗教の宗とは、宗教、宗要等と用いられ、「むね」と訓ずる文字であつて、生命それ自体のことである。これなくしては、生きるということも、道も、自覚も、光も、一切全て成立せざる根本をさして宗というのである。

聖徳太子は、十七条憲法第二条に、
「三宝は仏法僧なり。則ち四生（生きとし生けるもの）之終帰、万国之極宗なり。」と仰せられた。具体的宗教は三宝である。三宝こそは一切衆生の極宗である。真実であり、光であり、生命であり、道であり、生活である。

宗教

かるが故に、宗教は一切を超絶せる普遍の真理である。生命自覚の教えである。宗教とは生命としての教えである。かかる生命とは、必ず永遠に互つて平等普遍なるものであると共に、一切人に妥当するものである。仏教にあつては、如何なる一句一偈

の法文を宣説するにも、決して独断偏見を許さなかつた。必ず過去の教説に根拠しなければならぬ。これ曇鸞大師が「論主自ら我れ仏教によりて論を造りて仏教と相応す。服するところ宗あるを述べ」というもの、即ちそれである。これ、その信ずる所、説く所、必ず「宗」がなくてはならない。決して独断偏見の我を混入してはならない。仏教徒は必ず、師資（師と弟子のこと）相承し、血脈相承する。仏教こそは、独断偏見の混入を許さない普偏の真理である。

而してかかる普偏の教法は、又人の上に妥当して具体的事実となる。即ち普偏平等の教法は人の上に信心の自覚を成就して宗教人を生む。僧が即ちそれである。如何に高き真理も人に妥当しなければ空理である。人の上に妥当しても不変の真理でないものは宗教ではない。彼の神を信ずれば病が治る、と言うが如きは、一二の人に妥当しても万人に常に妥当しないが故に迷信である。

自覚

自覚は宗教の世界に於いてのみ誕生する。

人間の現実には決して理想的でない。教えを聞かざる以上、而して自覚を成就せざる以上、人は時に禽獣にも劣る。聖者は決して生れたままの本能的存在ではない。

個が個として我利我欲、仏教のいわゆる五欲我慢のままに生きる限り、全て抽象的存在である限り、たとえ善人といえども、賢者といえども、真の意味における賢善ではあり得ない。

かかる個をして全人（全人即菩薩）的自覚を成就せしめんがためには、そこに平等普偏の絶対他が君臨して、その個我的立場を粉碎し、普偏の生命こそ、その人格の本質となり、内容とならなければならぬ。而して、かかる自覚の根底は個我を超えたものである以上、永遠の彼岸、常恒不変の實在に根拠を求めなくてはならない。これ大乘仏教が、涅槃界即ち浄土を問題とする所以である。

人間の迷妄は否定せられねばならない。しかも個に個を否定する力なきこと、氷に氷を解かす力なきが如しである。唯たかき實在界からの平等普偏なる力のみ、個を否定して全人たらしめるのである。されば彼岸の風光を説ける仏典の中に、「常恒」又は「平等」等の文字を多く発見するが、一般に涅槃の徳は、常、楽、我、浄を以つて説かれる。涅槃が常住、大楽、大我、清浄であると説かれるのは、我等の現実界が、無常、苦、無我、不浄なるが故である。

かかる涅槃界より現実衆生の上にはたらしきかけて信心の智慧、即ち自覚を成就する力こそ、如来の本願力である。本願力こそは平等普偏の力であつて、限りなく衆生現実の迷妄を全否定し、その全否定を通して、彼の眞実を全肯定し、長く人格の内容となるのである。これ即ち宗教的自覚である。之れ以外に人間の眞の自覚はあり得ない。かかる究竟的自覚を持たざる人は、たとえ社会的には通常人として容認されるとも、眞の安住も、道も光も待たぬ人である。

経

仏教はその教相によつて聖道門と浄土門とに大別せられる。いわゆる聖道門に於いては、釈迦牟尼如来とは常恒普遍なる人格そのものである。八十年の生涯は衆生悲化の方便相にすぎないとする。然るに浄土門にあつては、釈迦とその理念界とは明確に区別せられて、而して後、その一異不可得を説かれる。即ち釈迦の背後にあつて、釈迦を釈迦たらしめたる普徧平等の法身こそ、尽十方無碍光如来と言われ、あるいは無量寿仏と称せられる。

この無量寿仏の因相果相等を具さに説けるもの即ち、仏説無量寿経である。斯経こそ、我が親鸞聖人をして「夫れ真実の教を顕さば則ち大無量寿経是れなり。」と断定せしめたる、唯一絶対の真実教である。

故に宗教の世界に於いて、直接に問題となるものは、教えを綴られたる「経」である。経とは、仏陀の自覚を言語を以つて表現せられたもの、糸を以つて花を貫き、以つて散らしめざるが如く、如来の言教よく法義を貫穿して散らしめざるが故に経と云うのである。経とは「たていと」である。

然るに又曇鸞大師は「経とは常なり。」と釈せられた。而してその理由として、彼岸の莊嚴の全ては衆生の上に大饒益を成就するが故に、常に世に行わるべきである、故に経と云うと。

経こそは、誠に常恒なる真実を説けるものである。かくの如く考える時、宗教とは実に「法」である。我等は所詮この法を聞くのである。法を聞き、法を生き、法を説く者こそ、僧である。僧こそは具体体的な宗教人でなければならない。(第十八巻第二号)

浄土の宗教と教育 四

僧伽

仏教は、仏、法、僧の三宝によつて成立する。凡そ宗教の世界に於いては、如何なる宗教と雖も、宗教の主体(仏、神)に帰依せよ、と説かぬものはない。而して如何に信じ如何に生くべきかの法を説き、之れを信ずべきを命ずることも同一である。然るに仏教に於いては、仏と法とに帰依すべきことを求むると共に、僧に帰依すべきことを説かれる。是れ仏教の特異性といふべきである。

僧とは、詳しくは、僧伽(Sangha)という。して「和」又は「衆」という。四人(新訳家は三人とす)己上の比丘が和して衆をなすが故である。僧とは和合衆のことである。而してこの和合に二義がある。一には、理和、理和とは、同一涅槃を讚することである。平等一如の証でなくて一に和合の出来ようはずがない。二には事和である。この事和に六義がある。

- 一、戒和同修 同一戒律を修することによつて和の生活を成就すること。
- 二、見和同解 同一見解に生きること。異見、異解では和は破れる。
- 三、身和同住 居住の同一和合。
- 四、利和同均 供養の利を均しくす。

五、口和無諍　口で争わぬこと。

六、意和同悅　同一の悦に生きることは、意業の和合である。以上の六和は、事即ち實際生活の和合である。

釈尊は仏弟子をして、絶対に和を成就せしめんとせられると共に、又「至心に、南無仏陀、南無達磨、南無僧伽と称えよ。」と、いわゆる三帰戒を示し給うた。僧伽は、大衆の帰依すべき宝となつた。僧伽の尊重憶うべきである。

僧伽こそは、和合僧である。清浄大衆である。世尊の教法の実現せられる世界であり、而して和合衆はやがて世尊と同一世界に至るべき人である。故に比丘たちは尊者と呼ばれ、やがて菩薩と名けられる。世尊の候補者であり、世尊を嗣ぐ人である。かゝるが故に僧宝なくしては、仏宝、法宝すら成立しないのである。僧宝は又仏宝、法宝から生れる。故にもし人、仏や法に帰依しても、その清浄大衆に入らず、帰依せず、これに反逆し、又は誹謗し破る者は、仏宝法宝にも亦帰依せぬものである。誠に理の当然である。かつての如何なる教団と雖も、世尊ほどその被教育者、その弟子を尊重した教育者があつたであろうか。ここにも、現代教育は一つの大きな反省がなされな

信心の智慧

先きに教育の理想について語る時、現代教育においての欠陥を徳器の成就、人を造ることの欠陥においたが、仏教においての教育は、実にこの一点の徹底化であると言つても差し支えない。宗教に於ては、人間の技術的能力、知的方面の優劣以前に、より根本的なものが問題とせられる。

釈尊の教団では、社会の最上位に於かれた婆羅門種の人も、王族である刹帝利種も、一般平民階級であつた昆舍種も、奴隸階級であつた首陀も、世尊の前には同一平等であつた。智慧第一の舍利佛も、名さえ忘れたと言われる愚老周利槃特も、同一仏子であつた。

これを以つておせば、博士も、山奥の木樵る人も、大臣も、一労働者も、全て平等に取り扱われ、それらの差別よりも、寧ろ、それらを超えての平等なる「道」の実践、道の根底としての自覚が要求せられる。

而してかかる自覚の世界は「智慧」によつて成就する。

智慧とは、才能でもなく、学識でもなく、もつと根本的な全人的な心の眼である。親鸞聖人の世界では「信心の智慧」とよばれた。博士にして智慧を持たぬものあり、老婆にして智慧の所有者であり、優等一番で通つた秀才に智慧なき人もあれば、頭脳は下を断定された劣等児でも、智者にはなり得る。蓮如上人が「それ、八万の法蔵を知るといふとも後世を知らざる人を愚者とす。たとえ一文不知の尼入道なりといふとも後世を知るを智者とすと言えり。」と言ひ「物を知りたりといふとも、一念の信心の謂を知らざる人はいたざらごとなりと知るべし。」と言われたのも、即ち仏教の第一義が信心の智慧にあることを示されたものである。

智慧の開眼こそは、仏教に於いては、絶対的であり、必然的である。ここにも現代教育の考えねばならぬことがある。

眞実生活と智慧

信心の智慧は暗を照す光である。自己自身の真相を自照する光である。智慧なくしては、自身の真相を照し出すことは出来ない。自身の真相さえわからない処に、人生の真相はわからない。智慧は赤裸々な人生に直面せしめる。

親鸞聖人は「金剛不壊の真心」と言われた。これ信心の智慧を言い表わされた言葉である。この文字によれば、智慧は常住不滅の真心である。随つて人間の本能ではない。金剛不壊と言われるが故に、何ものにも滅びざる、純粹相続の一心である。しかし真心である以上、我慢から出る意志の堅きではない。而して親鸞聖人の世界では、大無量寿経、眞実の教えによらずんば、他の如何なる方法によるも断じて、この真心にあうことも、発起することも、獲得することも亦不可能であつた。したがつて、宗教はあつても無くてもいいと言つたものではなかつた。

智慧は又、智慧光とよばれて、光である。眞実の光である。釈尊にしても、親鸞聖人にしても、それは人類の大きな不滅の光である。然らば何故に、これらの方々は、暗の世の光となられたか。皆、その胸中に不滅の智慧光が輝いたが故である。聖者は決して本能的存在ではない。世間的存在ではない。皆、価値的、文化的存在であり、出世間的存在であつた。しかし言う意は、人間のあさましい本能的、個我的欲望に動かされないで、実在界からの尊き光、即ち智慧光に生きた方であつたといふのである。その自証の光は同時に世を照す光であつた。

釈尊にしても、聖人にしても、その全人格は世の光であり、道義の象徴的存在であり、深い意味に於いては、ほんとうに人生を肯定した方であつた。貪欲漢が金があるが故に人生を歌うのとは違つて、それは、人生において暗が深ければ深いほど、その底に眞実を拝んだが故である。喜びに生きない者に誰が慕いよう。

ああ、智慧。智慧こそは人生生活の基調である。人生生活の根本基調にふれないで、そこに教育者があるだろうか。即ち宗教なくしていいだろうか。(第十八巻第三号)

浄土の宗教と教育 五

信心の智慧の成立

信心の智慧―それは親鸞の世界では絶対的なものであつた。それは、常恒不変なる大行の、個における実現であり、したがつて究竟的自覚の世界であるが故であつた。仏教に於いては、人が何であるよりも先に、如何なる技術能力、知識を有するよりも先に、智慧の所有者であらねばならぬことを求める。而してそれは、誠に、正しい人生及び我の見方、並に、眞実なる生活に出発しようとするものであるが故に、永久に肯定されねばならないことである。もし人類にしてこれを忘れるならば、如何に物質文明は進歩するとも、野蛮なる虎狼の如き世界より外に何ものも成就し得ないであらう。

信心の智慧は如何にして成立するか—信心は人格的自覚の問題なるが故に、内に成就する世界である。内に成就するとは、普遍常恒なる実在界よりの願力が個の上に君臨し、個の經驗的小主觀の迷妄、我執を粉碎、全否定して、個をして普遍の大行に帰命し、随順せしめ、やがてかかる本尊がその人格内容として一如に融合したる世界こそ、信心の智慧の世界である。而してかかる信心の世界は、凡小の自力によつて成立するのではなくて、全く如来本願力の廻向顕現によつて成就する純粹無雜なる彼岸に通ずる清浄心そのものである。

教法と信

既に言うが如く、信心は内に開く世界ではあるが、しかしそれは決して内に思い固めたる独断ではない。信心が成就される為には、そこに「外からの教え」が生きなくてはならない。即ち、信は、宗教的教育—大無量寿経の聖語で言わば、「諸有衆生、その名号を聞いて、信心歡喜する」、(「如来本願の真意」参照のこと)—によつて成就するのである。然るに教法は、天よりも聞かれず、地よりも湧かず、必ず、我より先に、これを信じ、これに生かされたる聖者の教説によつて聞かれるのである。

特に浄土の宗教とは、我よりも先に、既に、完全に如来によつて生き、その教法の眞実なることを身を以つて実証せる、我にとつての絶対人格が嚴然として存在したというのである。唯にかかる眞人格が存在したというに止まらず、やがて教えを通して、かかる人格と我との關係が、運命的なものであり、必然的なものであるということである。

かく言っている私でもが、如何にもさゝやかなる存在ではあるが、今、念仏の裏に、かすかにも歡び生きて、人生に生れ出でたることを肯定出来た所以のものは、全く仏説無量寿経の賜に外ならない。しかも、もし釈迦がなければ、眞実教あることなく、親鸞なければその領解の方法はわからない。特に日本国土に誕生しましたる如来の血潮に触れることは出来得ない。卒直に言えば、釈迦親鸞なくしては、私の生活はない。私の今はない。人生の眞の意味も、価値もない。親鸞聖人こそは、我にとつての絶対的人格である。

しかし断つておぐが、それは釈迦、親鸞そのものが、私にとつての「善知識」であるというのである。言いかえると、この両聖ましまさずば、久遠の如来本願を説ける眞実教に値うことが絶対に不可能であつたということである。親鸞聖人より外に私を救い得なかつたが、しかしそれは聖人が、微塵の私心を入れず、久遠の如来を生き、且つ、説きたまえるが為である。

唯に釈迦親鸞両聖のみならず、印度に龍樹、天親あり、支那に曇鸞、道綽、善導あり、日本に源信、法然等の聖賢があり、この外にも、正系傍系億々の人格があつて、その尊き一生を尽くして、教えを聞き、思念を凝らし、生活して、教法を限りなく大地の上に妥當せしめつつ、純化し、探求し、実験して下さつた尊い伝統の流れがなかつたならば、決して今、我等はかくも燦然として慶大なる大乘仏教の華の中に包まれることは出来なかつたのである。この喜びを得ることは出来なかつたのである。

唯、信は、己を空しうして、かかる真実教を聞くことによつて、内に開け、内なる世界がその究竟的展開の極、如来本願と一致して、本願による純粹無雜なる信の世界を成就するのである。

教界の再吟味

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せを被りて信ずるほかに別の子細なきなり。」

との告白は、以上述べるが如き、教法に対する純粹無我なる唯一不二の信の世界を明されたものであるが、誠に、「親鸞におきては、ただ（唯一絶対）念仏して（法）弥陀にたすけられまいらすべし（仏）と、よきひと（僧）の仰せを被りて（唯）信ずる外に別の子細なきなり。」との絶対帰依三宝の世界においてのみ、真実信心は成就するのである。

ここに於いて考えられることは、宗教の世界における教育と普通一般の教育とのいちじるしく異なることである。

仏教の教化が真に成立する為には、そこに、教えと行者、師と弟子との間に、無我一如の世界が成就して、その教化が絶対必然でなくてはならない。この絶対的であるということは、決して盲目的であれということではなく、教権に服従せよということでもなく、あくまで真実と虚偽との選択の眼の開かれんことを求めつつ、しかも決して二教二仏を並べざることを許さず、何ら強いられたる形なくして、しかも無我に自然に、絶対にその教えに帰依する所のみ、真実信心は成就するのである。

然るに、普通一般の教育は、かかる教育の成立には、いちじるしく寛容であることが思われる。寛容のみならず、時に甚しく粗悪である。極端に言うなれば、普通一般の教育には、かかる仏教的意味に於いては、殆んど教育は成立していかないかも知れない。又、求めることも不可能であるかも知れない。

体操に、唱歌に、理科に、かかる生命的教育は望まれないかの如くであるが故に。けれども低学年に於いては、教師は児童の眼には人格化されてさえない。低学年受け持の女先生は、時に便所に入ることさえ見られてはならない。しかし、それは淡雪の消えぬ間の風情であつて、やがて進むに随つては、かのストライキ、教師への暴行事件までに及ぶことがある。しかし、かかる相は私が言うまでもなく、世間常識の世界すらこれを認めない。

私は思う。もちろん、教育制度等の問題からも、考察されなくてはならないが、もし、教育者と被教育者との間に一如生命の交流を認め得ない処には、真の教育は断じて成立しないことを、この点は再三、再四、根本から再認識されなくてはならないと思う。もしそれ、如何なる方便によるも、遂に児童、生徒等の尊敬を買うことの出来ざる教師は、潔く、神聖なる教育壇上を去るべきであると思う。児童に教師選択の自由の許されない学校教育においてなるが故である。而して、如何なる教師にも遂に反抗より外知らぬが如き児童あれば、これこそ末恐るべきものであるが故に、学校は総がかりで、その冷たくひねくれたる魂の扉を開かなくてはならない。

私は仏教の信の成立の世界における教育の真価値を知るが故に、一般教育の世界において、無我的生命交流の世界の成就を以って教育成立の根本としたい。もちろん宗教におけるほど絶対的ではなくとも。（第十八巻第四号）